由来　大江の新地節と綾竹おどり

綾竹踊りの歌詞は，本来「潟担い歌」あるいは「新地節」と呼ばれる労働歌である。

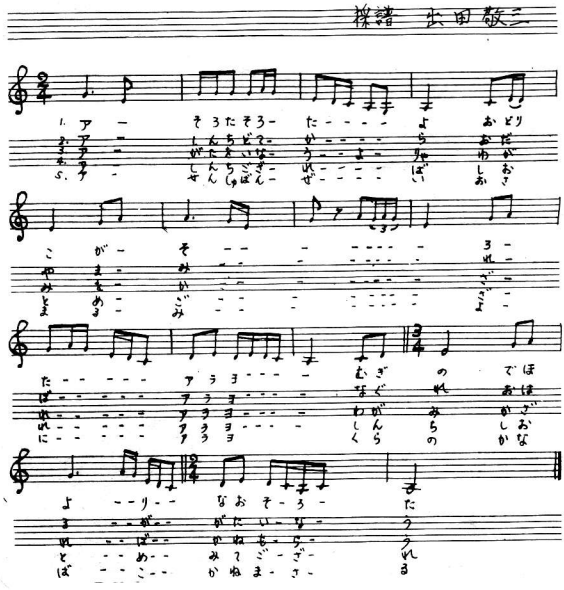
天草では松島町阿村の新地節は名高い。八代地方の千丁や鏡の大鞘（おさや）節も同様の歌詞と踊りである。これらと類似したものは佐賀の藤津郡，その他諫早や島原・玉名・出水などの有明海沿岸に広く分布しているといわれている。

発生については，文政４年（１８２１年）肥後藩最大の干拓工事であった八代の「７００町開き」にあるといわれる。防潮堤防の潟担い人夫として天草の阿村より３００人の男女が海を渡ってきた。その中に１８歳のお春がいた。利兵衛には妻子があったがお春は一途に心を寄せた。工事が終わってお春はひとり天草に帰っていった。いずれの新地節も労働の苦しさと共に２人の恋のいきさつを歌いこんでいる。

大江の綾竹踊りの歌詞はお春の恋に触れてはいるが，すでに一貫性に欠ける。間には歌詞とは無関係の卑俗なハヤシ詞が突飛っておもしろい。踊りは男装のガタ切りと女装のブリ担いが２人１組になり，何組か輪となって踊る形式が一般的である。

しかし，綾竹踊りは文字どおり棒踊りの流れをくむ花棒の系統である。赤白に色分けし鈴をつけ，竹筒の中に一文銭を入れ，綾竹を両手に持ち，軽やかに肩や膝に当て，回しながら踊る。

新地節系の綾竹踊りがなぜ大江地方に残っているかを考えると，大江地区の干拓に際して伝えられたとも考えられるが，それよりも，有明海沿岸の干拓工事の出稼ぎに出た人たちが覚えてきて，祝宴の席などで形式的に歌い踊るようになったと考える方が妥当と思われる。

新地節（綾竹おどり）

採譜　北田敬二